これはガイドの作用による「明晰なスピリチュアリティの普遍的な原則」の記録である。

全一性に目覚めることが癒しのゴールである。
癒しは「ガイド」の作用である。
このことを真に理解するために「ガイドの授業」がある。

Awakening to oneness is the ultimate goal of healing.
Healing is the function of the 'guide.'
In order to truly understand this, there are 'guide's lessons'.

【1】「源」の全一性：Oneness of "Source".

「源（source）」は全一性（oneness）という永遠の実相である。実相は誕生していないので消滅することもなく、永遠であるために変化することはなく、全一であるため時間も空間も分離していない。「源」はその自己同一性として霊（spirit）を延長している。したがって、「源」において「自己」とは霊のことである。

「源」は「愛」であり、「命」という全てのポテンシャルを持ち、「光」という霊を保っている。「愛と命と光」は全一性である。これらは「分離の夢」における愛情や生命や光ではない。知覚はエゴに属し、「源」は知覚できないため、「愛」も「命」も「光」も知覚できない。実相は全一性にあり、「愛と命と光」も全一性にある。これを「「ガイド」」という。「自己」には全一性の表現としての「全ての可能性」が内包されている。

全一性は霊の心で満たされているが、霊は分離していない全一性にあるので、そこに「何かが体験」されるということは起こらない。しかし、全一性にある「全ての可能性」においては全てが同時に体験され、終わってもいる。

【2】幻想としてのドリーミング: “Dreaming" as an illusion.

人の魂は全一性にある霊とは違い、一つひとつが個性的に分離の姿を表現している。そのため、魂には体験が可能となっている。魂が体験をするということは、個の魂が自らの意識の中に「情報とエネルギーと意識（想念）」によって作られた夢を見るということである。魂が持つ意識というのは、自ら夢を作り、自ら体験する仕組みのことである。この仕組みを「ドリーミング」という。

ドリーミングの体験に現実感があるのは、魂がドリーミングに意識を集中させて入り込み、その体験が自らが作っている夢であることを忘れることで感じられている。夢の中に登場する他の魂の姿も夢であり、体験する本人が作り上げている夢の一部であるが、その姿の向こうには確かに他の魂がつながってはいる。この仕組みもドリーミングの現実感を支えている。

個の魂は自らの意識の中に、体験が生成される時間や空間の「場」と、体験される「現れ」を同時に生成する。姿のない魂が自らの夢の中に「自分」の姿を作る時も同じように、「自分」が存在する世界としての「場」と、「自分」の「現れ」である肉体を生成する。

個の魂は「場」と「現れ」を分離することによってドリーミングの体験をしている。つまり、「分離の思考」によって魂は「分離の夢」を作り出して、その夢の中で「分離の体験」をしているのである。

【3】エゴとの同一化：Identification to the Ego.

「分離の思考」は「全ての可能性」の一つに過ぎない。しかし、ここには「恐れ」という問題が含まれていた。「分離の思考」というのは、全一性から分離した「自分」が「自分」を作るということは可能だろうかという思考のことである。そのため「分離の思考」は「エゴ（自我）」とも呼ばれる。エゴは「自分」と他の存在という区別の概念を作り出す。この概念によって体験されるドリーミングには、「自分」が受け入れることができないものも含まれ、そこに「苦しみ」が生じる。そしてその「苦しみ」が「恐れ」を感じさせることになる。そのため、「恐れ」というのは、全一性の霊を忘れることで生じている。エゴによって作られた「自分」と同一化してしまうことで、「自分」という体験が現実感が強いので、体験されている世界は現実なのであり、その体験の中に「自分」が受け入れられないものがあるなら、そこにある「苦しみ」は現実であると信じられる。こうして「恐れ」は強くなるのだ。そして、「恐れ」れば「恐れ」るほど「苦しみ」も強くなり、夢の現実感も強くなる。

「自分」が独自の存在であると思い込めば込むほど、「自分」以外の多くの他のものと離れていることが強調され、全一である霊の記憶との間に混乱が生じる。この混乱は霊の記憶を忘れていない魂の神聖な領域に葛藤を生み出す。これが「苦しみ」を生じさせているのである。

霊の記憶を忘れたあなたは、この「苦しみ」の原因を「分離の思考」によって理解しようとするが、それは不可能であるだけでなく、「独自の存在であることは全一に対する罪である」と考えるようになり、そこに罪悪感が生じる。この罪悪感によって、常に「自分が他の何かによって攻撃されて消えてしまうのではないか」という罰への恐れを感じることになる。そこで、「自分が強くなり、自分の幸せは自分の計画で獲得しなければならない」と考えるに至る。これによって、生存と獲得という動機を持つことになる。

エゴへの囚われが強くなればなるほど「自分」への執着も強くなり、同時に生存と獲得に対して強迫的になる。「自分」を否定するようなものから「自分」を守らなければならないと考えるようになり、そのために他者に対して常に「自分」の敵か味方かを判断することは大切であると考える。判断は「分離の思考」によってなされ、直感はそれに従うようになると、無自覚的にエゴを支持するようになり、ここに癒しが停滞する原因が生じる。

【4】エゴによる「分離の夢」と「分離の体験」
：Ego's "Separation Dream" of "Separation Experience".

エゴとは「分離の思考」である。それは、決して分離できない全一性（oneness）を忘れて妄想の中に入り込み、その夢の中で「自分」という特別な一つの存在を作り出そうと試みる思考である。この副作用として、全一の霊と分離の魂の在り方に歪みが生じ、その歪みが「苦しみ」として表現される。エゴの分離の思考実験では、以下のような過程を通して夢の現実感を作り出している。

[1]「分離の夢」：Separation Dream.

（1）「自分」を作るには、まず全一性から独立することが可能であるという考えを持たなければならない。
そのようなことは不可能であるため、夢の世界を作ってその中に引きこもらなければならない。

（2）「自分」とは何かを知らないので、夢の中では、何が「自分」ではないのかと判断され続ける。
「自分」という存在感を強化するためには「他者」との違いに注意しなければならない。

（3）「自分」を強化するために「他者」との差別化を計ろうとする。
さらに「自分」を強化するためには、「自分」の価値を上げるための「特別さ」を身につけなければならない。

（4）「自分」を守るために「他者」の脅威に勝たなければならない。
強化した「自分」の存在や価値は、常に「他者」により脅かされる。「自分」か「他者」かという二元性においては、「善」か「悪」かという判断も重要となる。当然「自分」は「善」でなければならない。もし「自分」が「悪」だとしたなら「偽善」の被害者であると考える。加害者よりも被害者に正当性が得られるからだ。
※そして、このことはもっとも守られなければならない秘密として抑圧される。無意識に隠されることで心理作用はより強くなる。

[2]恐れと怒り：Fear and Anger.

（1）神への怒り
「自分」という存在感が強化されるにつれて、全一性からの分離感も強くなってくる。霊と離れた魂に歪みが生じ、これによって不安を感じて混乱も強くなる。この混乱は「神への恐れ」、「運命への恐れ」という形で感じられ、表面化すると「神への怒り」、「運命への怒り」となる。
※本来不安という感情は、混乱の中で苦しまないように、全一性に戻れるよう用意されている癒しの感覚であるが、感情においても良し悪しの判断がなされてしまうため、不安は悪いとされてしまう。

（2）他者への怒り
多くの「他者」に対して「自分」は一人であり力は弱いと考えることから、いつ「他者」が侵入してきて「自分」が崩壊してしまうかと恐れが強化される。こうして「他者への恐れ」、「社会への恐れ」が生じ、表面化すると「他者への怒り」、「社会への怒り」となる。
※「他者」の侵入というのは、「自分」の価値判断の土台を脅かす考えである。例えば、「他者」に属するルールや思想、価値観などである。一番の恐れは、「自分」自身や「自分」の思想などが否定されることである。そのため、「他者」に「自分」を完全に明け渡すということはあってはならないと考えてしまます。これは、たとえ「ガイド」に対しても同じ歪んだ考えがある。「ガイド」に対する歪んだ考えは「宗教」や「神」に対する恐れとして表面化される。
※ここでの恐れというのは不安が強化されたものであって、強い妄想の中にのみ感じられる感情である。

（3）自分への怒り
「自分」が「自分」の作造主として「自分」の価値を作り上げることができるだろうかという不安も出て来る。もし「自分」の判断が完全に正しければ、「自分」に対する不満など微塵もないはずであるが、実際はそうではない。そこで、「自分」は「自分」の作造主として不合格なのではないかという判断がなされ、「自分の判断ミスへの恐れ」、「自分の能力不足への恐れ」という形で感じられる。これら「自分」への不満が表面化すると「自分自身への怒り」となる。
※この怒りもまた「分離の思考」の作用であり、「自分」の中で「正しい自分」と「間違っている自分」、「完璧であろうとする自分」と「完璧になれない頼りない自分」という葛藤によって、受け入れられない「自分」を理想の「自分」から切り離して責めるという働きが起きている。

【５】エゴの回し車：Ego's Wheel.

エゴは単なる思考であり、エゴによってドリーミングされた「自分」も世界も夢であるため実在しない。そして、現実感が強い体験を保つには、エゴに囚われた魂によってドリーミングされ続けなければならない。

全一性の「全ての可能性」の一つに過ぎなかったエゴという「分離の思考」に囚われた一つの心は、一瞬で無数の魂に分離し、一つひとつの魂が独自の意識を持つに至った。そして、それぞれの魂の中では、自らの意識の中に自分自身をドリーミングして世界の現実感を体験している。全一性である霊にとっては一瞬のことであり、「一瞬」とは時間ではないので、分離など起きたことはないのだが、エゴの「分離の思考」によって一瞬さえも分離されて時間が作られたために、エゴに囚われた魂では無限の時間の流れが体験されている。

エゴによって作られた無限の時間のことをドリームタイム（夢の時間）という。ドリームタイムでは、エゴは「自分」を保つために、魂の意識を「自分」に集中させる仕組みとして、「恐れ」を利用した「罪と罰」という還元的構造を作り出している。これはネズミの回し車と同じような構造であるため、「エゴの回し車」と呼ぶ。

「エゴの回し車」により、生存と獲得の強迫観念が強化されていく。これが全一性を思い出させないように仕掛けられたエゴの罠である。この罠に囚われることで本来の「自己」である霊を忘れ、「分離の体験」である「自分」の現実感が強くなる。「エゴの罠」は夢の現実感を作り出しているのだ。

【６】「自分」の価値：The value of "Myself".

全一性を思い出そうとすると「自分」が消える恐れを感じることになる。そのため、エゴに囚われた思考においては「自分」が消えることよりも、「自分」を強化するものに価値を見ることになり、全一性の価値は忘れられる。夢に価値を持ち過ぎているために、霊に目覚めることができなくなっているのである。

エゴを土台とした視点で価値を見つけようとすると、どうしても「自分」にとってのメリットを見ようとしてしまう。これが、「自分」を超えた全一性を思い出そうという意欲を削ぎ落とす罠として作用している。本来の「自己」は全一性であるため、もし「分離の夢」の中で本来の「自己」を思い出そうと意欲を持つなら、癒しが起きて、どうしても今の「自分」の価値が否定されるようなことが起きてしまう。その時に、それまでの「自分」の価値を守るか、それとも「自分」の価値を手放して、霊の価値を受け入れようとし始めるかという選択に迫られる。

ゆっくりと「自己」を思い出しながら「自分」への執着を手放していくという穏やかな道を歩んでも良いし、一気に「自分」への執着を手放すというチャレンジの道を歩んでも良いが、どちらにしても、最後は「自分」の価値への執着を手放すことは避けられない。「癒しの道」をいつ歩むかは自由に決められるが、無数に分離した魂の一つ一つには霊と離れた距離や離れ方の違いがあり、そこにそれぞれの魂の独自の戻り方があるため、すぐに癒しが進むかどうかは魂によって違う。このことを魂の特性という。

本来の「自己」を思い出した瞬間には、夢である「自分」も世界も「全ての可能性」の中に消え去る。全一性において「消え去る」というのは、作られたものが無くなるということではない。作られもしなかった夢から意識を離すということである。そのため、全一性においては初めから何も起きてはいないし、何も失ってはいない。そこに完全な平和がある。

エゴの夢の中で価値があるのは、「自分」を強化するために獲得されるドリーミングだけである。たとえそれが肉体の死で

あっても、「自分」の判断に基づく選択であれば、結果として「自分」は肉体を超えた強さを得たと考えられる。エゴの思考においては、「エゴは死にも勝る」のである。いったん「自分」を肉体という夢の姿の上に同一化させて、次に肉体の死を迎えて「自分は確かに存在しているのだ」と確認させることで、「自分」を崇高な存在へと成長させるというのがエゴの計画である。この計画の裏側には霊の価値を完全に忘れさせる罠が仕組まれている。

エゴの計画というのは決して「霊的な進化」ではない。霊は「源」の全一性において既に完成している。「霊的な進化」というのは、霊が進化するのではなく、分離したと思い込んでいる「自分」という夢の視点から離れて、そもそも分離などしたことがない霊が本来の「自己」なのだと目覚めていくことを指している。

「自分」の価値を手放して、本来の「自己」という永遠の価値に目覚めていくことが全一性を思い出す道であり、これが「癒しの道」である。「癒しの道」では、「自分」にとっての幸せや豊かさや健康を受け取っていくことになるだろうが、それは目的ではなく、霊の完全さが思い出されていく過程の一つであり、道の途中の美しい景色のようなものである。「自己」を思い出していく分、その景色の美しさはどんどん鮮やかになっていき、やがて幸せで豊かで健康であるのは当たり前のことだと分かる。完全に目覚めると、既に「愛と命と光」があることを思い出す。そこに「自己」の価値がある。

【7】根源的な恐れ：Fundamental Fear.

「明晰なスピリチュアリティ」は根源的な恐れによって拒否される。「明晰なスピリチュアリティ」は「癒しの道」において救いとなる普遍的な原則である。ここにエゴによる「分離の夢」を土台とするどのような概念も混在させてはならない。「明晰さ」とは、「分離の夢」である世界のどこにも属していない全一性の「光」の作用である。「光」は夢の中の光とは違い、知覚されることはない。夢の中の光は「光」を思い出させる象徴として使えるが、全一性の「光」は「自己」そのものであるために「外に見る」ということはなく、影を作ることもない。「分離の思考」の二元性においては光の反対に闇があるように思えるが、全一性の「光」には対立する「何か」というのはない。影を見たなら、それを作り出している「光を遮る者」がいるということだ。その者とは、まぎれもない「自分」である。あなたは自らの影を見て裁けるだろうか。

エゴは「分離の思考」であり脆い夢である。その上に作られた「自分」もまた儚い夢であるため、エゴによって生成されたドリーミングの世界は消えてしまう恐れで満ちている。根源的な恐れというのは、「自分」が消えてしまうという「無への恐れ」であり、そこで最大の敵はこの恐ろしい世界を作った存在であると想定される。この世界を作った存在という想定は「神」という概念を生み出し、エゴはそこにも分離の視点を持ち込んで「神」と「自分」という対立構造を作り上げる。このような「神」の概念は、「源」とはかけ離れている。全一である「源」と、エゴの概念である「神」は全く違うが、それが「分離の夢」の中にある魂の視点では同一視される。この混乱が多くの対立する文化的背景を作り上げ、争いが正当化されている。エゴの「神」は概念であり、象徴と物語によって作られている。

体験されているのは現実ではなく、「分離の思考」によって作られたさまざまな象徴であり、さらに言葉は象徴の象徴である。エゴは体験と言葉を利用して夢の現実感を強化する。夢のエゴの「神」を信じてしまうと、そこに属するイメージや言葉を否定することに罪悪感を感じてしまう。それほど意識は思考と同一化しやすいのだ。「神話」は「神」のイメージを作り上げている言葉である。「エゴの罠」に囚われた思考においては、「源」と霊についての理解は不可能であり、簡単な説明であっても難しく聞こえるような学習障害が生じている。逆にエゴの価値に属するものの理解はしやすい。そのためエゴの「神」は「源」よりもイメージしやすく信じやすいのだ。

エゴは「理解できないものに価値はない」と教え、目覚めへの意欲を削ぎ落とすように働きかける。そして「分離の思考」で理解しやすい世界にあなたを留めようとする。この世界そのものがエゴによる「分離の夢」の体験であるため、この世界

で知覚されるものはエゴに属することを忘れてはいけない。

エゴの思考が「自分」を作り出しているので、「自分」を信じれば信じるほど、夢との同一化が強くなり、「自分」を超えた大いなる霊を信じられなくなる。そして、エゴは「自分」を取り消すような考えに対して罪悪感を持たなければならないと思わせるので、「自分」の概念を超えた全一性など肯定的に思ってみることもなくなる。それでもよく観察してみると、この世界ではどうしても「自分」と「他者」、「自分」と「神」という対立が生まれている。この対立をなんとかしようと考えるなら、「自分」を取り消してはいけないので、「自分」は完全に正義ではなくても「他者」よりは正しいと考えざるを得ない。

もし、「自分」が悪いのだという思いで自殺を考えたとしても、必ずその裏側にはそのように「自分」を追い詰めた悪い「他者」がいるのであり、その裏で「自分」は被害者としての正しさが確保される。「自分」の正しさを持つ者だけが攻撃的になれるが、その考えは、「他者」も「自分」と同じように攻撃するという考えを生み出す。この考えを「神」に対して持つのであれば、「神」という「他者」も「自分」を攻撃するかもしれないという概念を抱くことになる。

人生に「苦しみ」があるのなら、この状況を作り出している「神」に対して恨みを持つことが可能となる。「自分」の弱さで「苦しみ」に打ち勝てないとしても、やはり、そのような弱い「自分」を作った「神」に対して恨みを持つことが可能となっている。「神」を否定している者であっても、「自分」を産んで育てた「親」に対して恨みを持つことが可能である。さらに、そのように恨みを持つ「自分」に対して恨みを向けることも可能である。これはとても都合が良く、「自分」を悪く思うことで「他者」を悪く言わない良い「自分」となることができる。

このような弱い「自分」や「苦しみ」の世界を作った「神」というのは間違いなくエゴの「神」であるが、「エゴの罠」に囚われている視点ではエゴの「神」が「自分」の創造主であると信じてしまう。このような混乱があるのは根源的な恐れがあるためである。実際、根源的な恐れというのは、霊から離れたことで生じた魂のバランスの歪みの感覚であるため、本来は恐ろしいものではない。根源的な恐れを持つことで「自分」を取り消すような癒しのプロセスと出会うと、「自分」は攻撃されたと感じるのだ。

【8】「ガイド」という「源」の力：Guide as the power of "Source".

この世界が夢であると信じられないほど現実的であるなら、エゴの思考と強く同一化しているということになる。これは「自分」が強いということであるが、強さというのは筋力や権力のことではなく、「自分とは、このような者である」という思い込みの強さのことである。「自分」が強いなら、エゴの夢に強く執着していることになる。

しかし、夢に囚われて本来の「自己」である霊へ戻れなくならないように既に「源」は「ガイド」という癒しの力を用意している。これは「源」と「自己」の延長という在り方そのもののことであって、特別な何かの存在ではない。そもそも脅かされることがない完全なる全一性においては、癒されなければならないことなど一つも起きてはいない。癒しというのは、夢の中でのみ価値がある。癒しの力には名前などないが、霊を思い出すことができるように魂を導くという意味で「ガイド」と呼ぶにとどめる。言葉は象徴の象徴であるため、「ガイド」という言葉に執着すると、その意味を見失ってしまうので注意が必要である。

霊という本来の「自己」へ目覚めるという「癒しの道」は「ガイド」に従って歩む道である。そのため「癒し」とは、魂が「自分」の力で行うものではなく、「自分」を超えた「ガイド」の力に従うということにある。

「ガイド」は夢の中のドリーミングを取り消して、そこから魂を自由にする「源」の作用である。どのような夢であっても、「ガイド」にとってはありもしない幻想であることは明らかであり、夢の強さや深さなどがあったとしても「ガイド」には意味をなさない。「ガイド」に夢を明け渡すなら、どのような夢も穏やかに「愛と命と光」へと戻される。「ガイド」に価値を明渡すなら、引き換えに「愛と命と光」という永遠の価値を受け取ることになる。真に癒しとは、全一性である霊に目覚める過程のことであり、それは「ガイド」によって平和の内に達成される。それ以外の癒しがあるとすれば、夢を強化し生存と獲得に駆り立てる「エゴの罠」でしかない。

もし夢の中に目覚めの方法を探そうとするなら、「分離の夢」を強化したいエゴが強く働き、決して夢から覚めないようにあなたの意欲を削ぐための罠を仕掛けてくる。「エゴの罠」には、逆さにされた視点で価値を判断してしまう「反転」、「エゴの回し車」で抜けられないようにする「反復」、「ガイド」に逆らうように仕向ける「反逆」があるが、どれも平和をもたらさない。エゴにとっては「自分」が消えるということは恐ろしいことであるため、「自分」を手放すことに罪悪感を持つように教える。そのために「自分」は罪深くなければならないとさえ思わせる。「自分」を手放そうとすると、「大いなる霊から分離して愚かで欲深い自分を生きているのに、それまでの罪をなかったことにして良いのか」というエゴの説得が聞こえる。

「癒しの道」ということは、エゴと同一化して混乱した意識状態が薄れていき、霊の全一性が思い出されていく過程のことである。そして、「ガイド」は夢の中で混乱した意識を正気へと戻すための唯一の救いとなる。そのため、「ガイド」の作用がない癒しというのはない。「ガイド」によって「分離の体験」としての「自分」の肉体と精神と魂はすみやかに解放され、夢に囚われた知覚は解放され、霊を思い出していく過程では「愛と命と光」が取り戻されて、自由と平和が確かなものとなっていく。「分離の思考」によって無数に分かれたようにみえる全ての魂も、全一性にある霊の延長されたイメージであることが「ガイド」によって明確になり、全てが霊に戻される。あなたはエゴの幻想との同一化を強めることはできるが、「ガイド」の影響がない状態になることはできず、せいぜいドリームタイムの中で「分離の夢」を引き延ばすことしかできない。

「癒しの道」を歩むということは、「自分」にとって顕在的か潜在的かということは関係なく、あなたがエゴを選択するのか「ガイド」を選択するのかということでしかない。ゆえに、癒しにおいての希望は「ガイド」であり、あなたの責任は「エゴの罠」が入り込む余地がないよう注意しながら、常に「ガイド」に従う意欲を持つことである。

実相である霊は全一性であり、「愛と命と光」の永遠の平和にある。「分離の夢」は実相ではないのだから、「分離の体験」をしている「自分」も幻想でしかない。無限に終わらない「自分」ではなく、永遠に完全である「自己」へ目覚めることが癒しのゴールである。これが明晰なスピリチュアリティの普遍的な原則である。